

---

# 夕日

rio

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕日

### 【Zコード】

N3778E

### 【作者名】

r.i.o

### 【あらすじ】

蒸し暑い夏の夜にお姉ちゃんは死んだ。轢き逃げだつた。お姉ちゃんが死んだ次の日にヒロさんはやつて來た。

全てを壊し  
全てを許し  
全てを包み  
そして

全てを消していく  
そんな赤だった

あたしを壊して  
あたしを許して  
あたしを包んで  
そして

あたしも消されていく

真っ赤に染められて  
沈んでいく  
赤い暗闇の中

善も悪も何もない。

ただ、赤いだけ。

窓から夕日が差し込んで部屋の中を真赤に染める。  
もじここの世の果てといつものがあるのならこんな風に赤く輝いてい  
ればいいなと思ひ。

全てを赤く呑みこむ光。

輪郭が溶けて、一つになつて、最後はただの赤になるのだ。

それ以上ヒロさんは何も言わなかつたし、私も何も言えなかつた。  
部屋の中はかなり蒸し暑いかつたけど隣に座るヒロさんの体温のま  
うがさらに熱い。

あの日もここの夕焼けだつた。  
お姉ちゃんが死んだ日も。

「ヒロさんが、お姉ちゃんを斬いたの？」

口が勝手に動いていた。

誰か知らない人の声みたいたつた。

ヒロさんの体が一瞬ビクッと硬くなつて、そして彼はゆっくりと口  
を開いて胸の中のものを吐き出すように呟つた。

「やつ、俺が斬いた。俺が…彩ちゃんを殺したんだ。」

ヒロさんは爪が食い込んで今にも血が流れきそうなくらい拳をき  
つく握つていた。

あんなに大きかつたヒロさんがとても小さく見える。

小さく震える肩と血の気が引いたその顔を見ていたら涙が出てきた。そのまま流れにまかせておいた。

ヒロさんは泣き出した私をチラリと見てからポツリと話し始めた。  
今にも泣き出しそうな顔だつた。

”太陽みたいな笑顔”はもう一度と見られないかもしれない。

「あの日の夜中、俺は一人での道を走っていたんだ。  
周りに車が一台もいなくてやけにひつそりとしていた。  
なんだか気味が悪くていつもより飛ばして走つてた。  
街灯もなくて本当に真暗だつた。

すると目の前に突然何か現れて…。

俺はあわててブレーキを踏んだけどすぐに何かがぶつかった嫌な音  
と感触がした。

人を、人間を轢いたんだってすぐに解つた。  
顔が見えた。

女だつた。

その女の顔が、一瞬だけだけど、見えたんだ。  
最初は見間違いだと思った。

でも俺があの顔を見間違えるはずがないんだ。」

ついにヒロさんは泣き出した。

お姉ちゃんのお葬式のときのように、声を殺して苦しそうに泣いた。

お姉ちゃんは8月10日の夜中、走ってきた車に飛び込むように自  
殺した。

お姉ちゃんの死体の発見は朝になつてからだつた。  
轢き逃げされたのだ。

「俺は怖くなつた。彩ちゃんを・・・、俺が彩ちゃんを殺したんだつて。」ヒロさんは泣きながら続けた。  
「じばらくなは放心状態だつた。

だけど急に、自分は何もしてないつて思えてきた。  
さつきのは夢だつたんだつて。本氣でそう思つた。

俺はすぐにその場から走り出して、家に帰つて風呂にも入らずに寝た。

一晩寝て、次の日起きたら何もなかつたことになつてゐんじやないかつて。

だけど朝になつて田が覚めてもやつぱりまだ怖かつた。

一度、あの場所に行つてみたら彩ちゃんの死体も血の跡も何もなかつた。

やつぱりあれは夢だつたんだつてほつとしたけど、でも何かがまだ不安だつた。」

ときの責めた顔。

一気に血の気が引いていたあの顔と、

「お姉さんが帰つてくるまで」の家で待たせてもらえないか。」と  
熱心に頼み込んできた姿に、

あたしは単純に　ああ、人つてこんなに人に恋できるんだな　と感  
心した。

羨ましいとさえ思つた。

誰かにこんなに心配してもらえるお姉ちゃんが羨ましい。  
そんな2人がすぐ素敵に見えた。

ヒロさんを部屋に招きいた瞬間、家の電話が鳴つた。  
お姉ちゃんの死を告げる叔母からの電話だった。

お姉ちゃんは難しい恋をしていた。

相手は会社の上司の人で奥さんも子供もいた。

「不倫でもなんでもいいの。」とお姉ちゃんは悲しそうに笑つた。

その人と関係が始まつてからお姉ちゃんは朝に帰つてくることが多  
くなつた。

ひどく酔つぱらつていたときもあつたし服がぐぢやぐぢやになつて  
いるときもあつた。

何ヶ月か経つた後は泣きながら帰つてくるよつになつた。  
出かけない日は毎日のように電話で言い争つていた。

お姉ちゃんの部屋から聞こえてくる泣き叫ぶような言葉たち。  
どこかの戯ドラでしか聞けないだるづと思つていた言葉たち。  
「捨てないで！」

「奥さんと別れてくれるつて言つたじゃない！」

あたしはただそれを聞いて部屋の隅でじつとしていただけだった。

そりに時間が経つとお姉ちゃんはだんだんと穏やかになつていつた。  
不思議に思つて「なんで?」と聞くと「あたしには素敵な友達が居  
てくれるから。」とお姉ちゃんは微笑んだ。

そいつ、お姉ちゃんのこと好きだな とあたしは思つた。

お姉ちゃんがこんなに静かになるまで根気よく彼女の話を聞いたの  
だから。

「どんな奴なの?」と尋ねるとお姉ちゃんは楽しそうに答えた。  
「団体はでかいけど、優しくて、笑顔が太陽みたいな人よ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3778e/>

---

夕日

2010年12月10日15時41分発行